

2003年(平成15年)7月10日(木曜日)

父は、私が幼稚園児のときから、私が幼穉園児のときになつた。そのとき、母は現金収入を得るために、記憶はほとんどない。初めて主体的に身内の死、葬儀に取り組んだのは、母方の祖母のときである。喪主は小学5年生だった私である。

戦争で疎開していた大分の過疎の村では、「死の処理」にあたって困難が多か

## 人生 締めくくりに

自分らしい最期

松島 知哉

②

った。火葬場は約4km離れた町にあり、遺体を運ぶにも、搬送手段が無い。火葬に必要な燃料の確保も一苦である。結局、村人の好意で、村落墓地の一角に土葬をした。以後、隣組で葬儀があると、私は学校を休んでも義理を欠かさないようにした。

やがて昭和20年代後半、日本経済も落ち着き、景気が良くなるまで、片田舎にも

貨幣経済の時代が来た。母は現金収入を得るために、妹を連れて大分を後にし、横浜市海員組合の寮で母の祖母のときである。喪主の私はそのとき初めて隣組の義務を免除してもらった。

それから半世紀、母は祖母の葬儀の香典帳を大切に持ち続け、お世話になった

人が亡くなったときは、義理を欠かさないように気を配ってきた。4年前に亡くなった母が「香典帳を始末したよ」と私に告げたのは死の数年前のことだ。疎開先で多くの人の手を借り、やっこの思いで祖母を送ったときの義理を、おおもね果たしたという安堵が私にもよく分かる。

現代の葬儀で、私たちは

## 葬儀に3要素

当たり前のように現金を包み、香典をやりとりする。だが、葬儀とは、香典とは何なのか。私は祖母の死を振り返るたびに、その原点を見る思いがする。

以後、私は身内や学校の恩師、行きがかりの人らさまざまに死に接し、葬儀の裏方も務めてきた。葬儀は多種多様な形があり、地域で考え方や対応が違う。だが、共通する、最大の大きな事は、「死(まは火葬場)、遺体の運搬

10年前はとっぴな考え方があったが、今はかなり浸透したのではないか。人の死には多くの慣習やタブーが残っているが、この「葬儀3要素論」から、単なる迷信、俗信として理解する機運も高まっている。「葬儀にタブーなし」。こう考えれば、肉親や縁の深い人の死へのかかわり方で悩むこともあまりなくなるはずである。



戒名もオプションに過ぎない—東京都豊島区のすがも平和霊苑で、小林努写真

(NPO法人代表)

老いじたく読本

毎週木曜日に掲載